



がん患者励ます リレー・フォー・ライフ

夜通し走り歩き、募金集めも
芦屋大会が起点の一つに、催し各地に広がる

雨の中、始まったがん患者たちの行進。先頭は車いすの尾坂美代子さん。押すのは明路英雄さん

ジャーナリスト 小川 明

夜通し、走ったり歩いたりして、がん患者や家族を支援するユニークな催し「リレー・フォー・ライフ」(命のリレー)が各地に広がりつつある。日本人の2人に1人はがんになり、3人に1人はがんで亡くなる時代になった。がんはごく身近な、ありふれた病気である。抗がん剤などの治療も徐々に進んで、がんを抱えたまま生きる人も増えた。患者には、がんの病名を伝えて、よく説明し、治療法を選択させる。そして、患者や家族も、包み隠さず、日常的に語り合う場面が増えてきた。こうした中で、がん患者に希望と勇気を与えようとするこの催しが注目されている。

雨の中、 患者らが元気に歩いた

運動の起点の一つになったのが、兵庫県芦屋市の芦屋市総合公園で開かれる芦屋大会だ。9月12日(土)、13日(日)にあった芦屋大会に出かけた。午後5時、雨の中、開会式が開かれた。大会長の山中健(けん)芦屋市長は「私も夜やってきて、市民の一人として歩きます」とあいさつ、雨の中、がん患者らが先頭になって行進を始めた。自分たちの手形を押しした横断幕を掲げた前を真っ先に歩いたのは、車いすに乗って駆けつけた神戸市灘区の患者、尾坂美代子さん(58)だった。患者仲間、ボランティアとして



左上) リレー・フォー・ライフ芦屋の開会式であいさつする大会長の山中健芦屋市長=9月12日、芦屋市総合公園陸上競技場

右上) がん患者に続いて横断幕などを掲げて歩くリレー・フォー・ライフの各チーム

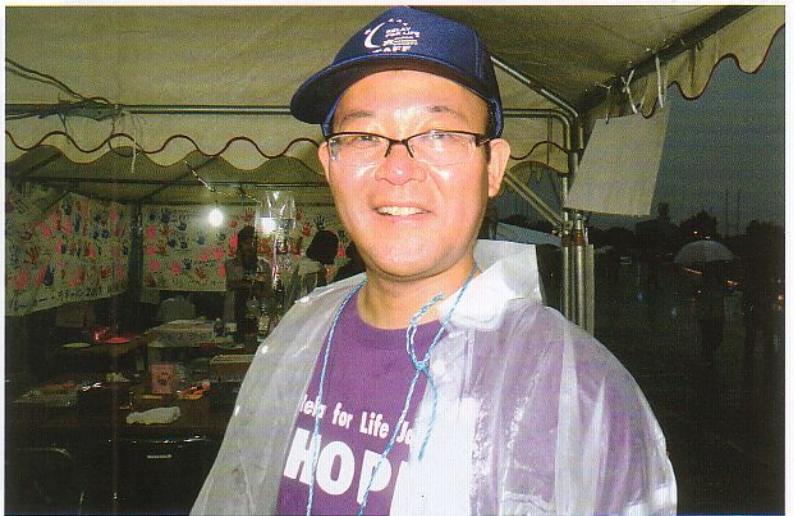
右下) やって来たがん患者が手形を押し、添え書きをして作った横断幕のサバイバーフラッグ

左下) 舞台上の誰も座っていないイスを囲んで開かれたがん患者追悼のルミナリエ

芦屋大会を支える兵庫県伊丹市の明路英雄さん(70)が「行くぞ」と力強く声を掛け、尾坂さんの車いすを押して、1周4000mのグラウンドを回った。明路さんは「みつけよう希望の光、届け遙かな想い」と書いたたすきをしていた。集まった数百人が後に続いた。地元中学校・高校のブラスバンドが演奏し、少女たちのバトンガールも声援を送った。

すっかり暗くなった午後7時半には雨もやんだ。鎮魂のための光のイベント、ルミナリエが始まった。ボランティアがペットボトルを切って手作りしたろうそくの火、約2000個が会場を照らし出す。風雨に遭っても火が消えないように工夫しており、「日々医学の進歩信じましょう」などメッセージが書き込まれている。参加者たちは亡くなったがん患者をしのび、サバイバー(がん患者と生存者)を励ました。観客席の芝生斜面には「HOPE」の大きな文字がろうそくで浮かび上がる。

この間、フラダンスや子どもみこしなども登場した。軽食を出す屋台もあり、お祭り気分をにぎやかに盛り立てた。参加者は無理をせず、時々テントで休んだりして、楽しんだ。走る距離や時間は競わない。ただ、がん患者を思い、走り歩いた。ランナーたちはチップを付けており、走ったり歩いたりした距離を自動計測し、それに応じて参加者が寄付金を自由に払う仕組みだ。第3回の今回は、新型インフルエンザの流行と重なったが、前回並みの約2000人が



リレー・フォー・ライフ
芦屋のボランティアの中心
になった実行委員長の
大隅憲治さん

参加し、このうち2割ががん患者だった。芦屋市総合公園の陸上競技場には約20の大型テントが張られ、寝袋で休憩したりしながら、友人同士や地域、職場、患者会、趣味のグループなど約60チームの誰かが患者のためにたすきを引き継ぎ、翌日の午前10時までリレーした。

米国生まれの支援イベント

「がん細胞は24時間眠らない。患者も24時間、がんと闘っている。患者を応援するために夜通し歩き走り続けよう」。こうした思いから、米国対がん協会の医師が1985年に、がん患者支援の募金集めを兼ねて、リレー・フォー・ライフを始めた。今では全米の約5000カ所で開催され、年間約400億円の寄付が集まるようになった。世界の20カ国以上に広がっている。このイベントを日本でも始めようと、日本対がん協会が各地の実行委員会と共催で取り組んだ。

米国生まれのチャリティーイベントといえる。それが日本に受け入れられるか、初めは懸念もあった。国内最初のリレー・フォー・ライフは2006年9月に茨城県つくば市で試しに開かれた。07年には芦屋と東京・お台場の2カ所であった。特に芦屋大会の成功がきっかけになって各地に広がり、08年度は7カ所、09年度は14カ所で開催されるようになった。09年度の14カ所（開催月）は北海道室蘭市（8月）、宮城県名取市（9月）、埼玉県川越市（9月）、さいたま

市緑区（9月）、横浜市港北区（9月）、静岡県御殿場市（9月）、岐阜市岐阜大学（10月）、兵庫県芦屋市（9月）、広島市旧広島市民球場（9月）、徳島県小松島市（10月）、高知市城西公園（10月）、福岡市海の中道海浜公園（10月）、大分市日本文理大学（10月）、沖縄県北谷町（10年3月）。がん征圧月間の9月と、乳がん早期発見啓発月間の10月に多い。各会場とも1000〜3000人と大勢の人が集い、がん患者支援の熱気を感じさせる。

米国での寄付金に比べると、けた違いに少ないが、それでも少しずつ増えている。08年度は7カ所で計1100万円の寄付が集まり、がんの無料電話相談などに活用した。また寄付の一部は途上国のがん支援に寄付された。米国対がん協会との契約で事業費の1%は世界のがん対策に寄付することになっている。地域の支援活動の催しが日本と世界のがん対策につながっているのも大きな特徴である。また新しい運動だが、3回を重ねた芦屋大会は最も経験があり、各地からの見学も多い。今回の芦屋大会では寄付金が100万円を超えた。

市民の協力が支えに

芦屋大会の実行委員長を務めたのが会社員の大隅憲治さん（41）。06年5月に37歳の妻を胃がんで亡くした。落ち込んでいる時に、つくば市で開かれた日本で最初のリレー・フォー・ライ



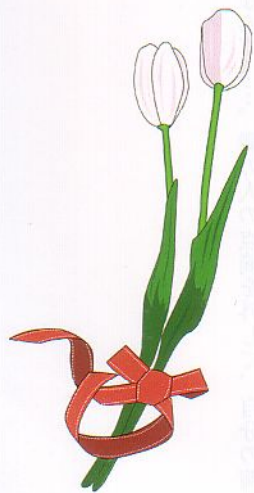
プレ講演会「ドラッグ・ラグについて考えましょう」を企画し、司会した「卵巣がん体験者の会スマイリー」代表の片木美穂さん

フに参加して感動し、関西での開催を探った。阪神大震災以来ボランティア活動に親しんだ芦屋で、地元団体や市の理解や支援も得て、07年に開催にこぎ着けた。約500人のボランティアがこのイベントを支える。芦屋市立病院の医療スタッフもテントの一角で「守り隊」として救護に当たってくれた。大隅さんは「がん患者だけのイベントではない。市民と一緒にやってがん患者を招待する催しだ。毎年ずっと続けて、社会のがんへの意識を変えたい。がん患者や家族、市民、医療従事者、行政、企業などの多数の思いを一つにして、全体でがんと向き合う社会を目指したい」と話す。

がんサバイバーの明路さんは40年近くも、がんの治療を繰り返して受けてきた。つくば大会に参加して感激し、大隅さんの呼び掛けにすぐ応じて、ボランティアとして芦屋大会に、07年の第1回から主要メンバーとしてかかわってきた。「ここへ来たなら元気がもたらえる。家族や友だち、医師、看護師らいろんな人や団体が来てくれる。患者会はいろいろあるが、このイベントのように、患者の年齢やがんの部位を超えて横断したものはない。続けていけば、がんサバイバーを招待して励ます催しがさらに広がる」と意義を語った。がん患者も参加して公園を夜通し使うことは前例がないため、当初は住民の反対も出た。「がん患者が徹夜して、何かあったらどうするのか。本当に大丈夫か」という疑問が投げ掛けられた。明路さんらが、公園に面する住宅街

を回って粘り強く説明し、納得してもらった。今は地元の子どもたちがみこしを出して、励ましてくれるまでになったという。

テントの中には、がん患者が横断幕に自分の手形を押して、その脇に「今年も参加できた」「毎日ありがとう、たのしく」などと自分の思いを書き込んでいた。毎回恒例のサバイバーフラッグだ。車いすで尾坂さんが現れた時は拍手がわいた。みんなが尾坂さんと一緒に歩けるのを心待ちにしていたからだ。尾坂さんは子宮がんになって6年、自宅でホスピスケアを受けている。放射線治療などで足が動かないため、車いすを使っている。退院して3日目だが、「ここに来れば、励ましになる。一人で悩まず、励まし合えば力がわく」と言う。実行委員長の大隅さんは「がん患者の孤独感や絶望感強い。患者が連帯感を深めてもらうのも趣旨だ」と話した。実行委員会と共に主催する日本対がん協会の荒田茂夫常務理事は「開催は倍々ゲームで増えている。芦屋がその先導役になった。市民の共感を得て、数年後にすべての都道府県で開けるようにしたい」と目標を語った。



深刻な ドラッグ・ラグ問題

迅速承認が課題、
芦屋の講演会で議論

リレー・フォー・ライフ芦屋大会に先立ち、9月12日午後、プレ講演会「ドラッグ・ラグについて考えましょう」が開かれた。その議論が興味深かった。欧米で使われている抗がん剤などの薬の臨床試験や申請、承認が遅れて患者に届かない。この遅れをドラッグ・ラグと呼ぶ。医薬品の最初の発売から自国で販売するまでの平均期間は日本が約4年。日本と欧米の新薬承認の時間差は平均2年半。東アジアの各国と比べても、日本の遅れは際立つ。日本の国民は新薬のメリットを十分に受けていないといえる。

講演会は、このドラッグ・ラグを解消しようと運動している「卵巣がん体験者の会スマイリー」が企画し、会場の芦屋市総合公園会議室に約100人が参加した。卵巣がんは抗がん剤が比較的効くが、健康保険で卵巣に使える抗がん剤の種類は日本で3種類だけ。欧米で10種類以上承認されているのと比べると、抗がん剤治療の選択肢は制限されている。この卵巣がん治療の惨状がドラッグ・ラグ問題をクローズアップ

した。

「卵巣がん体験者の会スマイリー」代表の片木穂さんがまず「がん患者からみたドラッグ・ラグ」について報告した。「世界中で使える抗がん剤がなかなか日本では承認されないことがドラッグ・ラグ。今年4月に卵巣がん承認された抗がん剤ドキシルは既に世界75カ国で承認されていて、アメリカからは10年も遅れた」と抗がん剤後進国、日本の現状を指摘した。ドラッグ・ラグの原因として①①治療コストが高い、薬の特許が切れた、患者が少ないからもうからない、などで製薬会社が申請しない②薬害への配慮、人材不足で国の承認が遅れる——と分析した。

ドラッグ・ラグは、全く日本で承認されていない場合と、ある病気には認められているが、ほかの病気には認められていない適応外の場合がある。抗がん剤では、適応外が意外に多い。片木さんは、泣きながら電話してきた女性患者の話を紹介した。外来化学療法室で点滴を受けていたところ、隣のベッドの人は肺がんだから抗がん剤のジェムザールを使えたのに、卵巣がんには使えなかった。その患者は「隣の国どころか、手が届くところに薬があるのに使えない

なんて……。隣の人の点滴を外して、自分の腕に刺したい気持ちだった」と不満を伝えてきたという。

15万人超す署名で承認要求

片木さんらは昨年10月から12月まで、卵巣がんの治療薬としてドキシルの早期承認を求めて署名活動を展開。15万4552人の署名を集めて、厚生労働省に提出した。この運動もあって、ドキシルは今年4月に承認された。この運動のきっかけになったのが長崎県南島原市の川上綾子さん(25)だった。06年、21歳の大学生時代に卵巣がんになって手術を受け、08年に再発した後の闘病生活と、抗がん剤の早期承認を求めている願いがテレビのニュースで報じられて、署名が広がった。その綾子さんと母親の由美子さんが「抗がん剤承認のために患者・家族ができること」という題で語り合った。

由美子さんは「昨年テレビに出て、反響がすごくあった。署名がたくさん郵送で届いた」と話し、娘の綾子さんも「当時は抗がん剤治療中で大変だったが、皆さんに温かく見守ってもらって、応援のメッセージを頂いた。署名を提出



講演会でドラッグ・ラグ解消の署名活動などを報告する川上綾子さん（左）と母の由美子さん

した時に対応してくれた厚生労働省の方も優しい方だった」と語った。綾子さんたちが今年1月に8箱の段ボール箱にびっしり詰めた署名を提出した際、厚生労働省の担当者は珍しくその場で承認を約束した。綾子さんは「みんなの思いが伝わって、すごくうれしかった」、母親の由美子さんも「あきらめずに周りの方に助けを求めれば、動いてくれる。みんなの力を合わせれば、国をも動かせる」と振り返った。がん医療の問題に関心を持てば変えていける可能性を強く印

象づけた。

抗がん剤治療で生き続ける

基調講演は、千葉県の松戸市立病院などで耳鼻咽喉科の医師として働いている小倉恒子（おぐら・つねこ）さん（56）が「乳がんなんて怖くない！ がんと共に生きる医師の一日一生」と題して話した。小倉さんは1987年に乳がんと分かり、手術を受け、2人の子を育てながら、医師としてがん患者として活動。2000年に再発、05年に再々発、全身に転移がありながら、講演活動や趣味の社交ダンスなどに意欲的な日々を送っている。

小倉さんは自分の闘病生活の経過を説明し、抗がん剤でおなかのリンパ節に転移したががんが小さくなった経験から「抗がん剤肯定者になった。ある抗がん剤の組み合わせが効かなくなったら、次、次と試みればよい。日本になくても、外国には抗がん剤がいっぱいある。今、ドラッグ・ラグは平均4年ぐらいだが、患者は4年も待つておれない。何とか短くしたい。あきらめない気持ちで、一緒に頑張っていきましょう」と訴えた。

引き続き小倉さんと片木さんのトークショー「ドラッグ・ラグが当たり前の治療を受けられない日本」に移った。片木さんは「再発用の抗がん剤の審査は後回しにされがちだが、再発した患者こそ抗がん剤が必要です」と語り、小



22年間乳がん闘い続け、基調講演する医師の小倉恒子さん

倉さんは「つらい思いをしているがん患者の命がビジネスの対象になる。いろんな治療法を整理しないと、わらをもつかむ思いの患者さんは足元を見られる。いい先生を見つuckerのは大変。悪い先生ほど自己アピールがうまい。インターネットのホームページに何回も出てくる先生や、最後まで治療の値段が出ていないのは、怪しい」と、効果が確かでないのに、野放しになっているがん難民ビジネスに注意を促した。

片木さんたちの運動もあつて、厚生労働省は承認の迅速化などドラッグ・ラグやデバイス・ラグの解消に取り組み始めた。どの抗がん剤を優先するか、という新たな問題も生じている。片木さんは「患者が生きていけるのか、治療法があるのか、は切実な問題だが、声を上げてくれる人は少ない」、小倉さんは「困っている人のために、患者会がもっと取り組んでほしい」と激励していた。

（小川 明）